

## 緑高校

# 「父と暮せば」

2018. 12. 24 上演5

1948年の広島市、バラックに毛が生えた程度の小さな簡易住宅で美津江とその父である竹造は暮らしていた。竹造は、美津江と彼女の勤務先である図書館で彼女をひいきにする木下とが相思相愛であることを見抜き、応援している。しかし、実は竹造は原子爆弾によって命を落としたため今は幽霊であった。そして2人のやりとりによって美津江が「自分は幸せになってはならない」と思っていることが判明してゆく……。

舞台セットの作りや汚れ、随所に置かれた小物がリアルだった。押し入れが、中にキャストが入っても大丈夫なほど頑丈に作られていた。また場面転換をする際にたくさんの人数を割いてカレンダーをめくったり、時計の時刻を変えておいたりすることで時間の経過を表したりしていた。ホリゾントの色を変えて天候を表現したりするなど些細な部分にも配慮を怠らない丁寧さが伺える。劇の最後に見える夕焼けも印象的で、平和な日常生活のあたたかさを感じた。さらに雷が落ちるシーンでは、キャスト、音響、照明の息が見事にあっており、三者のすばらしい連携に驚かされた。自然な音量の効果音や、その場で実際に役者が音を立てるといった工夫からはリアリティへのこだわりを感じた。また、美津江が地蔵を持ったときのBGMには、彼女の心境がよくあらわれていた。彼女や竹造の流暢な広島弁にはダイナミックさがあり、彼らの苦悩、葛藤がよりダイレクトに伝わった。他にも、美津江の言動から伝わる日本人女性特有の謙虚さの表現や、竹造が座るときの仕草や声に不自然さがなく、キャストの力量の高さを実感した。また、竹造が実はすでに死亡しているという非現実的な設定も、饅頭やお茶などの小道具の扱いなどから容易に受け入れられるようになっていた。これらの工夫によって舞台上にはまさに当時の広島市にある簡易住宅で育まれる1つの家庭の日常があり、我々は、そこで繰り広げられる美津江と竹造との本音のやりとりをのぞき見できているような気持ちになった。そのため、父を見殺しにした自分は幸せになってはならないという美津江の覚悟と、そんな娘を絶対に幸せにするという竹造の愛を心にとどめておくことが出来た。

戦争を起こし、原子爆弾を製造し、それを投下する、そんなむごいことをしたのは人間だ。しかし、美津江と竹造のような温かい日常生活を築き上げることが出来るのも、紛れもなく人間である。だから、私たちは末代まで戦争という浅ましい歴史を繰り返させてはならず、そのために昔の出来事を脚色せず、ありのままを伝承していかなければならないと思った。